

入善町じょうべのま遺跡 発掘調査概要 (3)

1975年3月

入善町教育委員会

発刊にあたって

じょうべのま遺跡については、文化庁、奈良国立文化財研究所をはじめ、富山県教育委員会文化課、並びに地元関係者の絶大なるご指導とご協力を得て、昭和45年6月より数次にわたり発掘調査を行なっており、あわせて遺跡の一部を県指定史跡として保存することができました。

これまでの調査で、遺構の広範囲にわたる拡がりと、平安時代初期と推定される庄家の遺構が発見されて、きわめて貴重な遺跡であると云われていましたが、その性格を確定するまでに至らなかつたために、今回更に未調査区域の発掘調査を行なった次第であります。

幸い上述の関係各位のご援助により、49年10月上旬より12月上旬にかけて調査がなされ、きわめつきとも云える木簡、馬形など多数の出土品が発見されて、ほゞその性格をつかむ方向づけがなされたものと、その学術的価値と歴史的意義に深い感銘を覚えております。

今後は、この遺跡の保存について、遺跡公園化など計画して、後世に引き継ぎたいと思料しておる次第であります。

本書が、埋蔵文化財の研究と保存に貢献できれば幸甚に存じます。

文末ながら関係各位に心から謝意を申し上げます。

昭和50年3月

富山県入善町教育委員会

教育長 清田清一

目次

例 言

I 経過と第5次調査の目的	1
II 遺構	2
1. A期以前	2
2. A期	2
3. B期	2
4. C期	2
5. D期	3
6. E期	3
7. その他	3
8. 遺物構築の基準	3
III 遺物	6
1. 須恵器と土器類	6
2. 銅鏡	7
3. 土師器杯底足の成形方法	8
4. 銀忠器・土師器実測図	9
5. 離軸陶器	10
6. その他の遺物	10
7. 須恵器とその他の遺物	10
IV 木製品	11
8. 木製品実測図	11
V 墓石器と木簡	12
1. 墓石器	12
2. 木簡	12
VI ジョウベのま遺跡の歴史と性格	13
参考文献	14
図版目次	16
図版第1	上-A地区全景、下-A地区南半全景
図版第2	上-A地区南半全景、下-SB027柱根とSB028柱穴
図版第3	上-A地区SB027・SH028、下-A地区SD022
図版第4	上-A地区SB027柱穴内壁、下-U地区SB026柱根
図版第5	上-A地区全景、下-U地区SB026
図版第6	上-第一主殿SB001、下-L地区全景
図版第7	須恵器、土師器と風字瓶
図版第8	綠釉・灰釉陶器と土器・砾石
図版第9	第五五湖在時発見の馬形・木簡
図版第10	第三次調査在時発見の木簡

例 言

1. 本書は、昭和49年10月11日から同年12月7日まで発掘調査を行なった入善町じょうべのま遺跡の第五次調査の概要である。

第四次調査までの成績は、調査報告書および報告書としてすでに公表されているが、本書では、これまでの調査結果を包括して取り上げている。

2. 本書は、昭和49年度国庫補助金の交付を得て入善町教育委員会が主催し、文化庁記念物課の指導と奈良県立文化財研究所ならびに富山県教育委員会の協力を得て実施された。

3. 当務課は入善町教育委員会に委嘱し、著者は課員の協力を得て講義代行石正雄が担当し、室長大庭正大が監修した。

4. 調査期間中、文化庁記念物課主任調査官北村文治氏、奈良県立文化財研究所平城宮跡調査部考古第3室長森田伸夫氏、同技官田中智雄、埋蔵文化財センター・技術官本多耕氏から調査指導をえた。また、調査の実施にあたって山口県教育委員会文化財課から飯塚正、岸本雅敏氏からの派遣を受けた。

5. 調査終了後、木簡・木製馬形等の整理・調査を行つて奈良県立文化財研究所埋蔵文化財センター坪井清洋、同調査部平城宮跡発掘調査部史財科調査室室長野久、同研究所平城宮跡発掘調査部史財科調査室室長川正剛の諸氏の指導を得た。

又、現地農家への川中久栄氏には、前面にひきつき現場事務所の提供を受けた。記して各所に対し謝意を申しあげよう。

6. 調査参加者は次のとおりである。

奈良県立文化財研究所平城宮跡発掘調査部森、田中、岩本（調査指導）、富山県教育委員会文化財課木本、中井（調査担当者）、富山県立砺波高等学校教師市岡久義、寺田大学子牛久々志義（調査員）、入善町教育委員会清田清一、大庭正大、石井正興、米田市次郎、尾山一郎、上田一郎、鶴谷利和、地元田中久栄、田中三正、田中静義、田中もり、田中静子、田中ハナ、田中やい、田中ひとと、高橋千子、島ときえ、鶴谷百合子、中島セリ子、大森やす子。

7. 調査区の測量は、田中、岩本が行ない、遺構実測原図は横木、岩本が作成した。

本書に使用した写真の撮影は、遺構については個別大（奈良県立文化財研究所技術）、岩本、岩本（第五次調査分）がおこなった。遺物については、上器・土器・土壤を岩本、神保保達（富山県教育委員会文化課）が行なったほかは、すべて個人が担当した。

今回の編集・執筆は飯塚正、中本雅敏が担当し、各々の文責は各章末に記した。

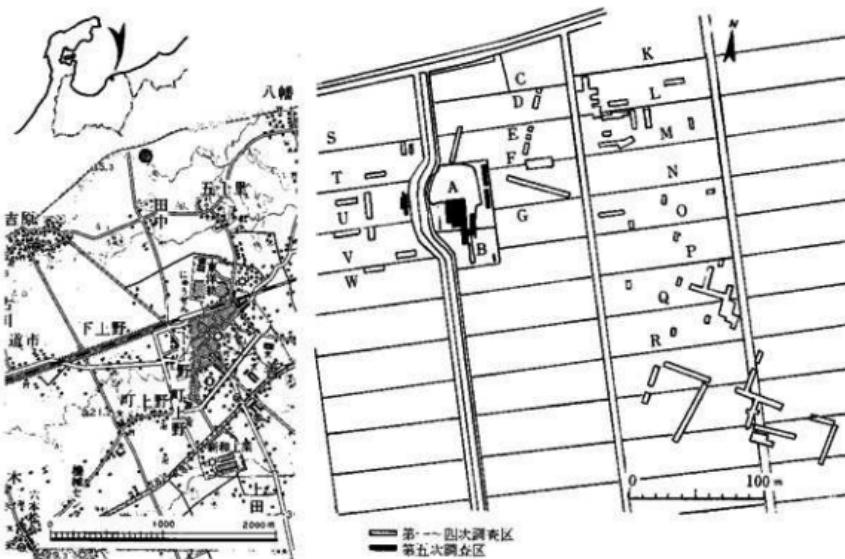
I 経過と第五次調査の目的

昭和16年ごろ、数本の柱根が発見されたことによって、知られるようになったじょうべのま遺跡に対して、昭和45年から同48年にかけて、入善北部土地改良事業が計画され、その実施に先立ち、四次にわたる緊急発掘調査が行なわれてきた。この間の経過は「富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」〔高島他編 1974〕に詳しいが、壇立柱遺構のありかた及び木簡・墨書き器・綠釉陶器・灰陶陶器・風字硯・杯碗などが検出されたことから、1—平安時代前期の庄園庄家跡である、2—「寺」から寺院関係の庄園に限定できる、3—五期以上にわたって建物が建て替えられている、4—海上交通を中心とした物資集散の拠点である。5—これらの性格は中世前半に属するL地区の遺構群へ引き継がれるの五点がその特性として把握された。

又、建物群の北側で湖、同東側で河川状の落ち込みが検出され、建物群を取り囲む、当時の自然景観が復原された。

一方、文献に残された庄園との具体的な比定問題がほぼ緊急発掘調査と平行して展開され、濱田氏の「新川郡衝説」〔濱田1970〕、奥田新作氏の「東大寺領伊豆郡庄説」〔奥田1970・73〕、石原与作氏の「西大寺領佐味庄説」〔石原1970・71〕、米沢康氏の「西大寺領佐味西庄説」〔米沢1971〕が相繼いで公表された。しかし遺跡からは決定的な資料が得られていないことから、問題は決着をみないまま昭和49年度へ持ち込まれることとなった。

第五次調査はじょうべの遺跡の性格を決定する上で不可欠な要素となる。文献上の庄園と比定し得る資料を求めて計画され、合わせてA地区庄家跡の構造をより明確にすることを目的として実施された。そして、所期の目的をはたすことができた。この点についての概要はすでに述べてあるが(橋本1975)、植物群の構成がより正確に把握されることとなった。以下、A地区における今回の調査結果に前回までの成果を含め、総括的にその内容に記述してゆくことにする。



第1図 地形及び区割図

II 遺構

今回、A地区において新たに二棟の建物が発見され、更にU地区から一棟の建物を検出した。いずれも平安時代前半に属し、前回発見分〔高島1972〕と発掘区の再検討によって追加されたものを含めて計21棟の建物が存在する。21棟の建物は、柱穴掘方の切り合い・配置そして方位の関係から前後六期に区分できるが方位そのものは南北には乘らない。更に幅もしくは幅も9列発見されており、大旨建物と歩調を合わせて設置されていたと考えられる。以下、より古い時期に属するものから順を追って解説する。

1. A期以前（第2図1）

主殿風の建物は検出されていない。建物は南北棟のもの二棟で、①SB 011はB期②SB 010より古く、しかもA期③SB 001と軒が重なることからA期以前に位置づけられた。

②SB 003は、同ブロックにおいて重複する六棟の建物の中で最初に建てられたものであることから本期に含めた。

二棟の建物の方位は一致し、しかも②SB 003の梁行北側柱列と①SB 011の南から2番目の柱列の方位が一致し、二棟の間隔はその位置で13.6m (45.3尺) となっている。

建物の規模は表1に示してあるが、二棟とも梁行が天平尺で割り切れ、①SB 011が15尺、②SB 003が20尺となる。しかし、柱間は天平尺に乘らない。

2. A期（第2図2）

建物の基本的な配置が完成している。

中庭風の広場を開んで北側に東西棟南北の建物③SB 001があり、その西側に南北棟④SB 002、東側に東西棟⑤SB 033、南側に東西棟⑥SB 034が配される。この建物群の東側と南側には櫛⑦SA 020・⑧SA 029が設けられ、建物群を開んでいる。③SB 001の北側にある⑨SA 023も櫛あるいは日隠し塀であろう。

⑦SA 020については桁行8間の建物とみる考えがある。しかし、柱間が等間隔に並ばないことと、梁行側柱が検出されていないことから櫛と考えておく。

③SB 001・④SB 002・⑦SA 020・⑧SA 029の方位はほぼ同方向であるが、⑤SB 033・⑥SB 034はやや東へふれる。この方位はA期以前の建物と一致しており、場合によればA期以前に属する建物と考えなくてはならない。この場合、⑦SA 020をA期の建物として位置づける必要性が生ずるが、A期を建物群配置の確立期として評価できることから、この配置を考えておく。

建物群は北に主殿、東と西に脇廊を配し、コの字状の配置となる。ここで主殿位置がのちに変更されることから、この北ブロックを第一次主殿位置と呼んでおく。

③SB 001の南面側柱列と④SB 002梁行北側柱列の方位が一致し、その間隔は1.7m (5.7尺) である。

A期建物の間尺もA期以前の例とどうよう。梁行が天平尺で割り切れる（表1-③～⑥）。

3. B期（第2図3）

A期③SB 001の東寄り後方に桁行5間の東西棟⑩SB 019が新たに作られ、西脇廊⑪SB 025はA期④SB 002の位置からやや北方へ上げて建て替えられる。

東脇廊は桁行10間の南北・長棟の建物⑫SB 010となる。本遺跡では最大の建物である。⑬SA 014は日隠し塀あるいは⑭SB 010の廻と考えられる。⑭SB 010には南・北両側から二間目に間仕切りがあり、東一間は廻となっている。

A期の主殿である③SB 001は本期まで存続した可能性がある。このように考える場合、⑩SB 019は後殿として位置づけされるが、あるいは③SB 001に替わる建物か、C期に属する建物とも考えられる。又、長棟の建物⑫SB 010も主殿的な建物と言えそうであり、主殿位置が北部から東部へ移るきさしを見せている。

接風の建物⑯SB 015の西側に位置する、⑯SA 032（第2図7）は、建物群との方位が異なるが、⑭SB 010の日隠し塀である可能性が強い。

建物群の方位は、A期③SB 001・④SB 002からみるとやや東にふれ、A期以前並びにA期⑨SB 033・⑩SB 034と一致する。

⑪SB 025の梁行北側柱列と⑭SB 010の北側間仕切り柱列の方向が一致し、その間隔は18.3m (61尺) である。

建物の間尺は、術・梁行とも天平尺で割り切れる（表1-⑩～⑯）。

4. C期（第2図4）

B期SB 025は南方へ移されて⑮SB 004となり、B期⑯SB 015は⑰SB 035に建て替えられる。

⑯SB 016は東と南に廻を持ち、その西方には日隠し用の廻もしくは櫛⑯SA 018が設けられる。⑯SA 018についてはA期もしくはD期とも考えられるが、A期には⑦SA 020、D期には⑯SA 036（第2図7）が対応できそなので、一応C期と考えておく。

⑯SB 004の梁行北側柱列と⑭SB 016の梁行北から三番目の側柱列の方位が一致し、その間隔は18m (90尺) である。又、一応B期とと考えた⑮SB 019の梁行東から三番目の柱列と⑯SB 016の梁行西側柱列の方位が一致し、その間隔は14.1m (47尺) となっている。⑯SB 019をC期と考えたい理由の一つがここにあるわけであるが、このように考えると⑯SB 016を主殿として北に脇廊⑯SB 019、南

に脇殿⑪SB 035、そして主殿の正面に西面殿⑫SB 004を配したことになる。

建物の間尺はB期どうよう梁行・桁行とも天平尺で割り切れる(表1-⑩-⑪)。

5. D期(第2図5)

C期の主殿である⑬SB 016はやや西へ方位がふられて、⑭SB 017となる。⑭SB 017の東一間は廂で、規模的にはA期SB 001と似る。南脇殿⑭SB 035は北廂東西棟の⑮SB 028に建て替えられる。この廂部北側柱列と⑯SB 017の梁行南側柱列の方位が一致する。⑰SA 036はこの⑯SB 017の日隠し塀である可能性が強い。又、西面殿は、南北長棟の⑯SB 005となる。

建物の間尺は桁行で⑯SB 005・⑯SB 017が天平尺で割り切れるが、他のは割り切れない(表1-⑩-⑯)。

6. E期(第2図6)

D期主殿SB 017は、規模が小さく中央に間仕切りを持つ東廂の建物⑯SB 018に建て替えられる。この西側には目隠し塀⑯SA 031が設けられ、南脇殿⑯SB 027・西面殿⑯SB 006が配される。南面殿⑯SB 006の北側に接する⑯SA 007は、この期の櫛と考えられる。又、⑯SB 026は、倉庫と考えられ、この周辺に各期の倉庫群が存在すると考えられる。

建物の間尺は、⑯SB 027の桁行以外は天平尺で割り切れず他の時期とその内容が異なっている(表1-⑩-⑯)。

7. その他(第2図7)

⑯SB 012については所属時期が全く不明である。柱穴掘方から平安時代前半に属する上器類が検出されたことから、A-E期のいずれかに属する可能性を持つが、桁行西側柱のみを生かしてE期の櫛と考えることもできる。

又、柱穴が小さいことから、SX 024(第3図中央)とともに中世の建物とも考えられる。平安時代の建物とすれば、方位及び配置から、A期もしくはD期に属する可能性が強い。

⑯SA 032については先に示したようにB期に、⑯SA 036はD期に、⑯SA 030はE期に属する櫛と考えているが確定する材料はない。

8. 建物構築の基準

じょうべのま跡遺の建物群はその全てが磁北に乘らないで、かなり西方にふられて構築されている。しかも、柱間寸法は天平尺によるいわゆる完数尺をとらない例が多い。

表1では各建物の桁・梁行の長さと各柱間の長さを示し、それに天平尺を基準尺とみなしして割り出した数字を対置させてある。

ゴチャックで示したものは尺で割り切れる寸法であるが、各建物群は大きく3つの傾向を持つものに整理できる。

すなわち、A期以前及びA期は、梁行の長さが完数尺となり、梁行の柱間も9間・10間の寸法を取るものが多い。

B・C期は桁行・梁行とも完数尺となり、柱間は完数尺を取るものと取らないものが粗中途する。

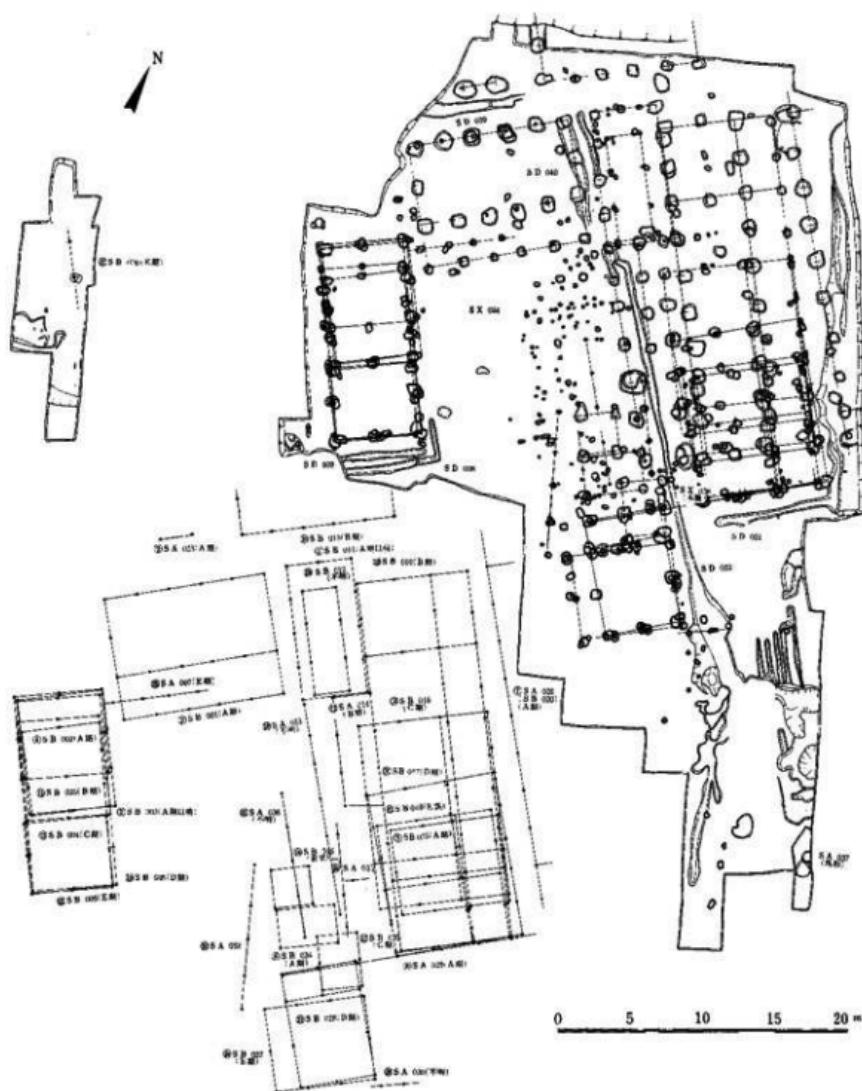
D・E期になると、桁行・梁行とも完数尺を取る例が少くなり、柱間もばらつきが目立つようになる。

普通、余良・平安時代に属する掘立柱の建物は、柱間を完数尺でおさえながらその大きさをきめるわけであるが、本跡では最初に建物全体の大きさを完数尺でおさえ、後に柱間を適当な長さで分割したものと考えられる。したがって柱間寸法が完数尺に乘らない結果を招いたと言える。したがって、A期以前及びA期は梁行、B・C期は桁・梁行、D・E期は桁行に構築上の自安を置いていたと考えられる。



第2図 造構変遷図

又、建物群全体の配置（縦張り）は西側の建物の梁行北側柱列を基準にした可能性が強い。（橋本）



第3図 A・U地区造構実測・配置図

番 号	時 期 分 区	遺 構 名 の 方 位	柱 間 数 桁 × 梁	規 格 = 桁 × 梁 × 梁 (尺)	柱 間		(尺)		備 考
					桁	梁	身 合	廊	
①	A期以前	SB 011	南北棟	4 × 2	9.3 × 4.5 (31)	2.3 (15)	2.25 (7.7)	2.25 (7.5)	
②	A期以前	SB 003	南北棟	3 × 2	8.0 × 6.0 (26.7)	2.2 (20)	3.0 (7.3)	3.0 (10)	
③	A期	SB 001	東西棟	5 × 3	11.2 × 8.4 (37.3)	2.2 (28)	2.7 (7.3)	3.0 (9)	南廊、B期まで存続か
④	A期	SB 002	南北棟	3 × 2	5.8 × 5.4 (19.3)	1.9 (18)	2.7 (6.3)	2.7 (9)	
⑤	A期	SB 033	東南棟	3 × 2	7.5 × 6.0 (25)	2.1 (20)	2.7 (7)	3.0 (9)	A期以前か
⑥	A期	SB 034	東西棟か	1 × 1	4.0 × 2.7 (13.3)	4.0 (9)	2.7 (13.3)	2.7 (9)	棟か
⑦	A期	SA 020	南北	9	23.2 (77.3)	2.6 (8.7)			(建物か) 東廊
⑧	A期	SA 029	東西	6	16.4 (54.7)	2.4 (8)	2.8 (9.3)	3.0 (10)	2.6 (8.7)
⑨	A期	SA 023	東西	1	2.2 (7.3)	2.2 (7.3)			南廊
⑩	B期	SB 019	東西棟	5 × (2)	10.5 × () (35)	2.1 (7)	2.4 (8)		C期か
⑪	B期	SB 025	南北棟	2 × 2	5.7 × 6.0 (29)	2.9 (30)	3.0 (9.7)		
⑫	B期	SB 010	南北棟	10 × 3	25.5 × 7.5 (85)	2.5 (25)	2.6 (8.3)	2.5 (8.3)	東廊、間仕切り2ヶ所 1. 西庄、2. 田中出土
⑬	B期	SA 014	南北	3 × (1)	7.5 × (2.1) (25)	2.3 (7)	2.1 (7.7)	2.1 (7)	SB 010の西面か
⑭	B期	SB 015	棟	1 × 1	2.7 × 2.7 (9)	2.7 (9)	2.7 (9)		
⑮	C期	SB 004	南北棟	2 × 2	4.8 × 5.7 (16)	2.6 (8.7)	2.2 (7.3)	3.0 (10)	2.7 (9)
⑯	C期	SB 016	南北棟	5 × 3	12.6 × 9.0 (42)	2.4 (30)	3.1 (8)	2.9 (10.3)	3.2 (9.7)
⑰	C期	SB 035	東西棟	1 × 2	2.7 × 3.8 (9)	2.7 (12.7)	1.9 (9)	1.9 (6.3)	東廊、南廊 12. 「二ツ」出土
⑲	C期	SA 013	南北	6	14.7 (49)	3.0 (10)	2.5 (8.3)	2.0 (6.7)	2.2 (7.3)
⑳	D期	SB 005	南北棟	5 × 2	13.2 × 5.8 (44)	2.7-3.0-2.3-2.6 (9)(10)(7.7)(8.7)	2.9 (9.7)		間仕切り
㉑	D期	SB 017	南北棟	5 × 3	11.4 × 8.9 (38)	2.3 (29.7)	2.2 (7.7)	2.7 (7.3)	3.5 (9)
㉒	D期	SB 028	東西棟	2 × 3	5.2 × 8.0 (17.3)	2.6 (26.7)	3.0 (8.7)	2.0 (10)	北廊 5. 「西庄」出土
㉓	E期	SB 006	南北棟	5 × 2	11.8 × 5.6 (39.3)	2.3 (18.7)	2.6 (7.7)	2.8 (8.7)	
㉔	E期	SB 018	南北棟	4 × 3	8.8 × 7.9 (29.3)	2.2 (26.3)	2.7 (7.3)	2.5 (9)	東廊 13. 「二ツ」出土
㉕	E期	SB 027	東西棟	3 × 2	6.9 × 5.8 (23)	2.3 (19.3)	2.9 (7.7)		
㉖	E期	SA 007	東西	3	5.8 (19.3)	2.8 (6.7)	1.8 (6)		
㉗	E期	SA 031	南北	3	6.4 (21.3)	2.2 (7.3)	2.3 (7.7)	2.5 (6.3)	
㉘	E期	SB 026	南北か			2.4 (8)			食庫か
㉙	不明	SB 012	南北	3 × 1	7.2 × 2.4 (24)	2.3 (8)	2.6 (7.7)	2.4 (8)	中世建物又はE期構か
㉚	不明	SA 030	東西	1	1.5 (5)	1.5 (5)			E期か
㉛	不明	SA 032	南北	4	10.0 (33.3)	2.3 (7.7)	2.6 (8.7)	2.8 (9.3)	B期又は中世
㉜	不明	SA 036	南北	4	10.1 (33.7)	2.9 (9.7)	2.4 (8)		D期又は中世

表1 建物・構一覧表 (番号は第2・第3図と共通、ゴチック体は片で割れるもの)

III 遺物

1. 須恵器と土師器（第6図）

今回の調査で、A・B・U地区から検出された土器は、土師器・黒色土器・須恵器・施釉陶器である。その大部分は土師器と須恵器が占めており、両者の数量的な比率は、おおよそ3対2である。しかし建物（柱穴内）出土品の場合は、4対1であり、前回の調査結果（舟崎1974）と変わらない。

出土土器には完形品が一例もなく、すべて細片であった。しかも器形を復原できるものが僅少であったので、ここでは前回の出土品をもあわせて取り上げることにする。

出土土器分析の視点と方法 土器の分析にあたっては、以下の視点に立った。

本遺跡出土土器の実体は、舟崎久雄氏によってすでに報告されている。舟崎氏は、「建物が重複しているが、比較的短期間に営まれたとみられる」遺跡という立場から、型式学的な土器細分の可能性を認めつつも一括して報告している（舟崎1974）。

しかし、建物群が六期に分かれるということは、遺跡がかなりの期間にわたって継続していたはずであり、その立場に立って土器を概観すれば、出土土器の内にある程度の型式系が認められてくる。そこでこの点をふまえて、六期の建物に対応した土器型式の細分が可能かどうか検討を加えることとする。

北陸地方における奈良・平安時代の土器の編年研究は、吉岡康暢氏によって精力的に進められてきた。氏は、「加賀三浦遺跡の研究」において、同遺跡の土器をその層位によって、「三浦下層」・「同中層」・「同上層」に三分し、その年代については、「三浦中層」を奈良時代末ないし平安時代初期、「三浦上層」を平安時代後期に位置づけた。さらに、これをもとに北陸地方の奈良・平安時代の土器編年作業を行ない、北陸における編年の基礎が示された（吉岡1967）。

その後、富山県において、庄園庄家跡と考えられる井波町高瀬遺跡・人善町じょうべのま遺跡が相ついで調査され、この時代の土器の実体も次第に明らかになってきており、それとともに、その編年位置づけをめぐる論議が高まっている（高島他編1974）。

また舟崎久雄氏は、両遺跡の研究成果に立脚して富山県における須恵器の編年を示し（舟崎1974）、これを機に加賀三浦遺跡上層出土土器群との年代差が問題となってきた。

一方、藤田富士夫氏は富山県立山古窯跡群出土の須恵器を、特に成形技法に焦点をあてて分析し、五基の窯跡を編年した。そして他地方との対比から、その年代を8世紀末～10世紀初めに位置づけた（藤田1974）。

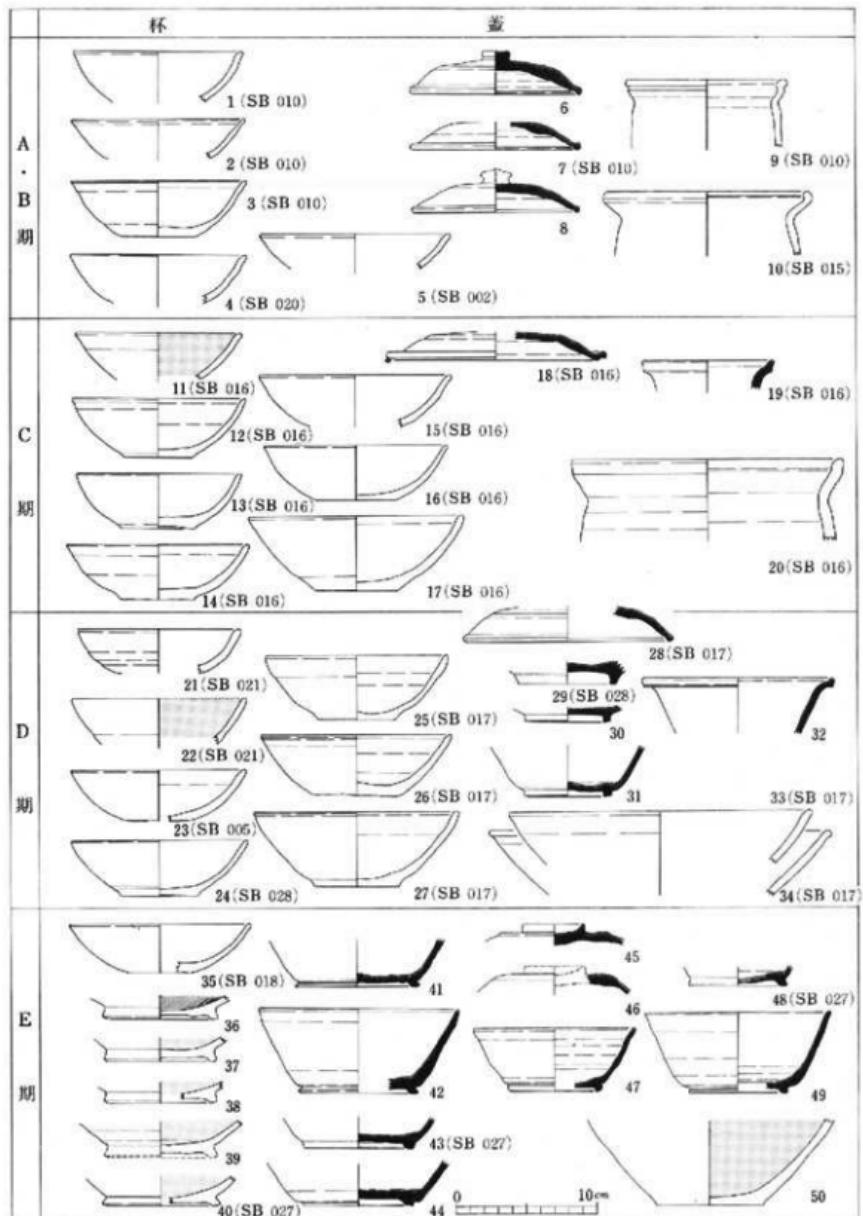
さて、上述の視点に立って土器を分析するにあたってここでとった具体的方法は、まず出土土器の中から建物跡（柱穴内）出土品を抽出し、それらを建物ごとに一括し、その建物の所属時期によってその土器群をさらに五区分し、建物の変遷に対応させた。これを配列し、図示したのが第4図である。この作業を通してみられる各期の土器の様相を、以下述べる。

A・B期 土師器杯は、口径13cm未満の杯A I（1～4）が主体をなし、口径13cm以上の杯A IIはわずか一点（5）にすぎない。総じて小形品である。胎土は緻密で焼成は堅硬である。3の外底面には糸切り痕がみられ、その他もすべて糸切り底と考えられる。須恵器蓋6は、ヘラケズリした頂部に偏平形のつまみをつける。口径12.4cmの小形品で、器高は高く3.1cmを計る。内面は硯として使用されている。端部は内側へ折り曲げられており、やや丸味をもつ。出土地点からS B 011（A期以前）に伴う可能性があり、また型式学的にも本遺跡では最古の部類に入る。これに次ぐものとして蓋7・8がある。いずれも小形で、頂部にヘラケズリを施す。

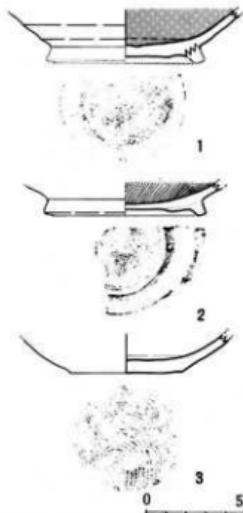
C期 土師器では小形の杯A I（11～14）に加えて、杯A II（15～16）がやや多くなる。土師器杯は、すべて糸切り底で無高台である。内外面ともヨコナデする。黒色土器（11）のみは、内面にヘラミガキを施す。杯A III（17）は、口径15.3cmの大形品で、外面はヘラケズリし、端部から内面にかけてはヨコナデ後、ヘラミガキを施す。土師器杯は、形態的には、外底面に接した箇所で一度くびれて立ち上がり、体部へ連なるものが多い（12・13・14・17）。

須恵器蓋（18）は、口径15.6cmの大形品で、端部はの字状にくびれている。頂部はヘラケズリである。型式学的には、上記の蓋（6・7・8）とかなりのへだたりがあり、むしろD・E期のものと併行させた方が無理なく理解できる。

D期 土師器杯A IIが多くなり、杯A Iとの比率はほぼ同じである。調整法は、内外面ともヨコナデを基本とする。形態的には、外底面からくびれて立ち上がるもの（24・25・27）と、ただちに放物線を



第4図 須恵器・土師器の変遷



描いて立ち上がるもの（23・26）との二種ある。

須恵器蓋（28）は、口径14.5cmを計り、大形である点は蓋18と同じである。端部はわずかに内方へ折り曲げており、18と比べると古い様相を示す。須恵器杯B（29-31）は、いずれもほぼ直立する高台をもつ、杯29の外底面は硯として使用されている。杯30・31は、杯29との類似性およびE期の杯（48）との型式的対比からこの期に置いた。蓋32は双耳瓶か。33・34は大形の杯か。外面の調整はヨコナデ、内面はヘラミガキによる。

E期 E期出土の点数は多くないが、土師器杯では小形の杯A Iが主体をなす。その大部分は、外底面からただちに曲線を描いて立ち上がるものである。

高台付きの土師器・黒色土器杯B（36-40）は、この期になってみられる。いずれも外底面には、わずかに糸切り痕をとどめ、高台に接した部分はヨコナデしており、したがって糸切り後に高台を貼り付けたことがわかる。37-40は黒色土器で、内面のみ黒色でヘラミガキしている。内面に暗状のヘラミガキを施した杯36（第5図2）は、製作手法・高台の形状とともに黒色土器（37-40）と共通しているが、内面が黒色でない点が異っている。この一群の土器は、高台が付けられている点を除けば、杯部の形状・底部の切り離し技法とともにその他の

第5図 土師器杯底面の成形技法 須恵器杯（41・42・48・49）は、外方へふんばる低い高台をもつ。（1・2糸切り後、高台貼り付け、3糸切り底）杯（43・44）は、肉厚の高台をもち、高台は内方へやや傾斜する。蓋（45・46）は、環状のつまみをもつ。大形の黒色土器（50）は、内面のみ黒色でヘラミガキしている。外底面は糸切り後ヘラケズリしている。

考察と問題点 以上の作業を通して、本遺跡における各期の土器の実体を把握した。

須恵器では、杯と蓋によって大まかな変遷をつかんだが、その中で特に注意されるのは、A期以前の建物に伴う可能性がある蓋（6）である。型式学的にも本遺跡では最古に属し、8世紀末に位置づけられている石川県三浦遺跡中層の出土品に類似する。したがってこの土器によって本遺跡の上限を求めるべき年代を8世紀末頃におくことができる。

土師器杯は全体として変化に乏しく、外底面糸切り底・内外面ヨコナデの土器（第5図3）が一貫して基調をなしている。大きさは薄手から厚手へ、そして高台付きへと変化する。

底部を糸切りによって切り離したのち高台を貼り付けた土師器・黒色土器（第5図1・2）は、E期に集中してみられ、その出現の時期もこの期にあると考えられる。これと同手法の土器は、石川県加賀三浦遺跡上層の出土品中にみられる。本遺跡のものはそれらと近似した様相をもつが、編年的にはより古い位置におくことができる。

ところで、東北地方では本遺跡の土師器と同形態・同手法の土器が、須恵器として生産されている。このことは、本遺跡の土師器が、土師質のものとして焼成されているにもかかわらず、技術的には須恵器の技法によっていることを示している。この現象は、土師器生産と須恵器生産との密接な関連を示すものとして理解されている〔小笠原1971〕が、本遺跡出土の土器についても、須恵器生産体制の中で土師器も生産されたものと考えられる。こうした段階を経て、古墳時代以来の須恵器・土師器生産は、古代末期には事実上解体し、中世的陶器生産体制に再編成されていったと考えられる。この考証的具体的な検証は、今後の課題としたい。

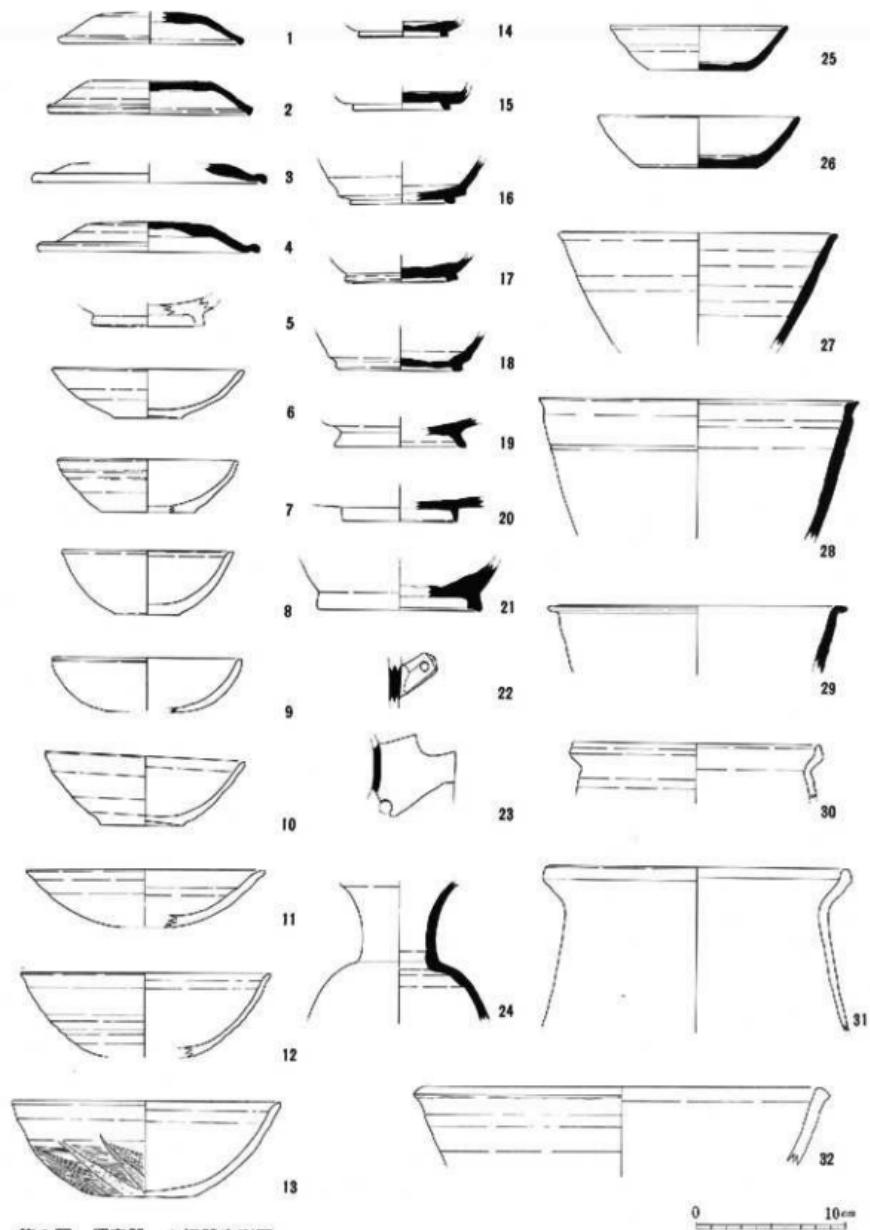
（岸本）

註① この補定は、本遺跡の土師器がすべて糸切り底であることから裏づけられる。

註② この種の環状つまみは、出雲国序跡出土の奈良時代～平安時代初頭の土器に普遍的にみられる〔坪井・町田1970〕。これから、第4図における位置づけは、さらに適切な位置づけであると考えている。

註③ E期の土器の年代比定については、本書Vにおいて後述する。

註④ 内面に同心円状の凹形あて其の痕跡をとどめる土器の発見（金沢市専光寺町出土）の存在や、石川県和氣第一号窯で少量ながら土師器と同一器形の甕・鍋を焼成している事実〔吉岡1967〕などは、こうしたとらえ方において理解すべきであろう。この点の考え方については、橋本正氏の御教示を得た。



第6図 須恵器・土師器実測図

2. 施釉陶器（第7図）

緑釉陶器（第7図1～5）五点と灰釉陶器（第7図6～8）三点がある。すべて細片であって、原形を復原しうるものはわずか一点であり、したがってその他は図上で推定復原をおこなった（第7図）。

原形を知りうる5は、口径15cm、底径6.6cm、高さ2.8cmの皿である。1～4も同じく器種は皿と考えられるが、碗である可能性も否定できない。1・2・5は、いずれも口縁部がやや内輪気味に開き、高島忠平氏による分類〔高島1971〕では皿Aに属する。底部をとどめる3～5は、いずれも円盤状にけずりだした平底（a種）であって、いわゆる蛇の目形底部（b種）や輪状をなす高台（c種）はみられない。なお、口径は復原推定によれば、1が13cm、2が14cmである。

1～4は、いずれも内外面ともに鉛釉が施されており、色調は薄黄緑色を呈する。5のみは内面にだけ施釉されており、また釉の色調も濃い緑色を呈し、前者とは異っている。これら緑釉陶器は、すべて胎土は緻密で、焼成は軟陶である。

灰釉陶器7は、口径17.4cm、底径7.4cm、高さ2.1cmの皿である。口縁部外面に棱がつき、口縁部端が外反する（皿B種）。6も同じく皿と考えられる。8の器種は、碗と一応考えておく。底部の径は6が7.6cm、8が7cmである。6～8ともに胎土は緻密で、灰白色を呈する硬陶（須恵質）である。いずれも内面にのみ施釉しており、この点は上述の緑釉陶器と異っている。

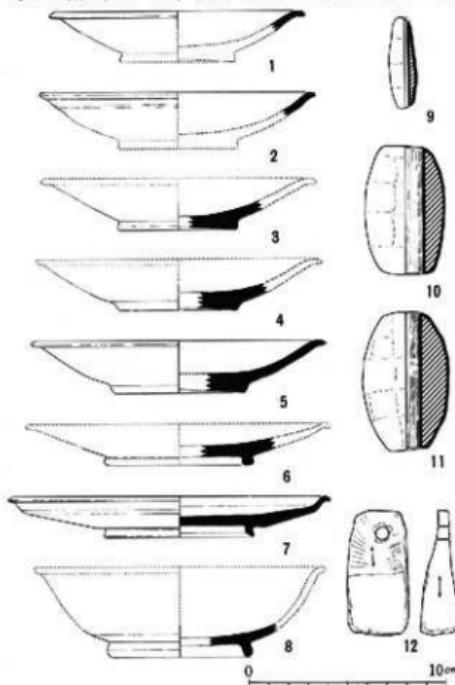
さて、これらの緑釉・灰釉陶器とほぼ同時期と考えられるものは、奈良県平城京東三坊大路東側溝の出土品〔高島1971〕に求めることができる。この溝の出土品は、伴出した総計七百余枚にのぼる皇朝十二銭と紀年銘をもつ告知札から、9世紀後半を中心とする時期の所産と考えられている〔高島1971〕。

これによって本遺跡出土の施釉陶器の年代は、9世紀後半頃と考えたい。

（岸本）

3. その他の遺物（第7図）

土鍤と砥石がある。土鍤は前回までの例品と同じく、大型のものにA・Bの二種が認められる。小型のものは数が少ないが、前回の調査でも検出されている。



第7図 緑釉陶器(1～5)・灰釉陶器(6～8)・土鍤・砥石実測図

砥石は、小型完形のもの1点と、小型の断片が1点発見されている。大きさからみて、刀子の研ぎ出しに利用されたものと考えられる。二点とも、体部表面に酸化鉄様の附着物が認められるが、磨面はよく観察できる。

図示した完形品の上端に、紐かけ用の穴が穿たれている。しかし磨面からみて、紐をかけずに使用したと考えられる。この穴を中心に、表裏ともには放射状に細線がつけられている。刀子の刃並びを調整した痕跡とも考えられるが、戯劇的に女性の陰部を表現した可能性もある。例品はあまり見ないが、宮城県多賀城遺跡出土の平瓦内面に同様の線刻があり〔水野1974〕、あるいは共通するものかも知れない。（橋本）

4. 木製品（第8図）

今回発見された木製品のうち、馬形の他に具体的な用途がわかるものは、箸・漆練用の箆のみで、他の大部分は未完成もしくは用途不明品である。

特に注目できる木製品としては馬形がある。関連資料と考えられる第一次調査時に検出された人形断片とともに紹介する。

用途不明品（第8図1～4）

1は両端が欠失しており、2は一端が尖らされている。両者とも杉材を使っており、

あるいは小型の抗拒と考えられる。体部は小刀状の刃物で8~9に面取りされて、ほぼ円形の断面となる。

3は柾目の檜材を角柱状に削り出したもので、一端は四方から溝状に切り込まれている。この切り込み部で折られたけいせきが認められる。他端は欠失しているが、体部の一面が抉り取られており、あるいは粗末の未成品と考えられる。体部の四面はていねいに削り取られており、ほぼ平面となっている。

4は柾目の杉材の一端を切先状に削り取ったものである。用途は全く不明である。

他にスリコギ状の棒状品、各種の削り屑が検出されている。削り屑は特に手斧屑が多く、SB 028の柱穴から目立って出土した。

馬形（第8図5、図版第9~1）

目のこまかい柾目の杉材を削り、馬の側面を表出している。

頭部の上方に二個（一対）の耳が削り出しで表現され、体部上方には鞍が同じく削り出しで造られている。尾は太く、ビーンと後方へ張り出されており、全体の形はタツノオトシゴと似る。

足部は欠失しているが、短かめに表現されていたと考えられる。

片面には墨書きで、櫛・目・たてがみが描かれており、特に目の表現は当時の人物のそれと描きかたが似ている。

木製の馬形は初見のものであるが、その形式的特徴は、平安時代の遺品として知られている土馬と類似している。

板状の石製馬形は、福岡県沖ノ島遺跡で多数検出されており〔宗像神社復興期成会編1958、宗像大社祭祀遺跡調査隊編1971〕。その特徴は本例とよく似ている。又、特に言及はされていないが、長野県網掛跡あるいは朝日松遺跡発見の鉄製品〔信濃史料刊行会編1956（図版第195一下）〕も馬形の一種と考えられる。これらの馬形は材質の違いに関係なく、同一的な目的のために製作される。

馬形は水に関連する遺構である、井戸・溝中や、祭祀遺跡から発見される例が多い。このことから水に関する祭事や神祇などへの手向の品として製作されたと推定されている〔坪井1973、水野1974など〕。

本県では木製の馬形が須恵器窯跡から検出されている。一例は小杉町新造池窯跡〔山内1966〕で、今一例は高岡市平岡窯跡で採取されており、いずれも奈良から平安時代前半にかけての時期に属しており、何らかの祭事に用いられたと推定できる。本県においても、当時、かなり広範囲に製作・使用されたことを示している。

人形（第8図6）

柾目の杉材を使用している。足部のみで他は欠失している。

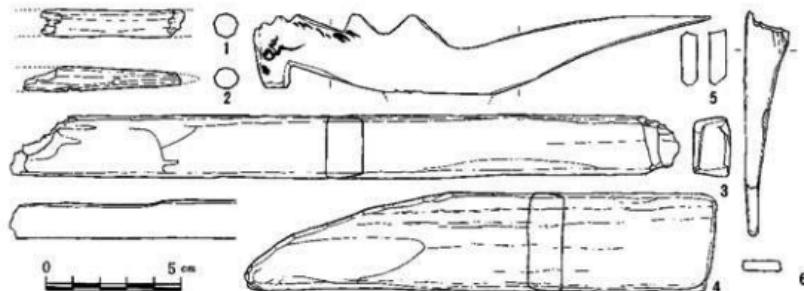
奈良時代の人形は藤原宮跡・平城宮跡で検出された例が名高く、中には呪いの人形が含まれている〔坪井1973など〕。当時の精神生活を知る上で、重要な資料である。（橋本）

註① 平城宮跡発掘調査部上条善通氏の指摘による。

註② 国立博物館文化財センター長坪井清氏の教示による。

註③ 富山考古学会員黒田正雄氏の採集資料で、作出の須恵器類はほぼ8世紀前半に比定できる。

註④ 土馬は窯跡で製作された製品とみることも不可能ではないが、質が土師質であることを、決して無理されたとは思えない並に検出されていないことから、操業に関する祭事に用いられたものと考えておく。特に新造池窯跡は細片化しており、祭事における取り扱われかたが推察できる。



第8図 木製品実測図

IV 墨書き土器と木簡

墨書き土器は図示した十八点の他に二点の小断片がある。一方、木簡は今回の調査で検出されたものを含めて計六点となっており、他に二点の割りかけ状のものがある。

以下、前回までの報告分と重複する点もあるが、それらを集めて概述する。なお、記文については図中で示したので必要以上の重複はさける。

又、図示した他に関連資料として「匁に十斗匁」と針書きしたモノサシ状の木製品が出土している。

1. 墨書き土器（第9図1～18）

墨書き土器は須恵器・土師器とともに認められるが、量的には土師器が多く、須恵器に墨書きした例は図示しなかったものも含めて、わずか四点に過ぎない（7・9・17）。

器種は杯が大部分を占めており、他は須恵器杯蓋（観）が一点（17）となっている。

杯にみられる墨書きは、文字が書き込まれた部位によって三群に大別でき、記述内容によって更に細別できる。これに杯蓋の一例を一群として加え、計四群に大別しておく。

第I群 杯外底面〔橋本1974〕に墨書きされたものを一括する。「匁廿」が九例有り、内二例（7・9）は範切痕をとどめる無高台の須恵器杯である。他は糸切痕を残す土師器杯で、B期S B010の柱穴（1）、D期S B017（4）、同S B028（5）からそれぞれ一例ずつ検出されている。6は東臨殿に属するものであるが、D期S B018に属する可能性が強い。他は所属が不明である。ここでこの「匁廿」の墨書きをA類とし、他はB類と細分しておく。

B類は「匁匁」あるいは「匁匁」と読める例（15）と、不明のもの（18）が各一点づつある。二個体とも糸切痕を残して高台を貼り付けた土師器杯に属しており、時期的にはD・E期に限定できる器種である。

第II群 杯体外面〔橋本1974〕に墨書きされたものを一括する。11以外、書体を縱にした場合、口縁部が左側に来る。書き込みに際して部位がある程度統一されていた可能性が強い。墨書き内容は、12「匁」（C期S B016）、11「匁」（不明）、14「匁匁」…あるいは「匁匁」（D期S B017）、13「匁」（E期S B018）、16「匁匁」（不明）で、計五点となっている。特に11は本遺跡を守護の庄園と関連づける意味で重要な資料であり、16は「宅」あるいは「宅」である可能性が強い。

第III群 杯内底面〔橋本1974〕に墨書きされたもので、10「匁廿」（B期S B010）が一点検出されている。

第IV群 須恵器杯蓋の天井外面に記されているが（17），内容は不明である。あるいは「舍」か。本個体は糸切痕を残しており、本遺跡では類例が少ない個体である。

2. 木簡（第9図19～24、図版第9・10）

木簡はほぼ原形を止留めているものと、切削などによって原形を失ったものに二分できる。以下、型式名を平城宮跡の成果〔奈良国立文化財研究所編1969〕に従って概述する。

6081型式 三例検出されており、いずれも第一次調査時に発見された。

19はA期S B001の柱掘方から検出されたが、20・21は出土地点が不明である。

19・20は舟形に二次的な割りが加えられており、使用済みの木簡を齊串にした例と考えられている〔岡本1972〕。文意は19・20とも不明であるが、1については「匁」・「帽上」と記されていることから、文書的な木簡であったと判断されており、裏面には「匁匁十斗匁」と日付けが書き込まれている〔狩野1974〕。この19・20の材質は杉材であり、あるいは元、同一個体であったかも知れない。

21は上端・左側がほぼ原形をとどめているが、左側は割れ、下端は切り込まれている。元は短筒形であったと考えられる。

字数は約十字とかなり多いが、文意は不明である。最上位の墨書きは二字程度と解されているが〔狩野1974〕、一字で梵字あるいは記号風のものとも考えられる。

6051型式 22・24の二例があり、22は第三次、24は第五次調査で検出された。

22例とも頭部は半頭状に削り出されており、下端は両側からの削りで尖らせている。

22はD期S B018の柱掘方から出土したが、文意は不明である。あるいは齐串か。

24は柱穴ではなく小穴から検出された。表側の第一次は「帽」の可能性が強く、以下の「匁」などともに人名を示すものであろう。以下、「斗田米ニサ」と書かれ、裏面には「匁匁十斗匁」と日付けが記されている。某人が上納した白米五斗に取り受けられた付札である。材質は板目の檜材である。

6033型式 全体の形状は6051型式と似ているが、頭部側面から結束用の切込みが入れられている（23）。一例検出されただけであるが、記載内容は本遺跡中、もっとも重要なものである。6051型式に属する24と共に検出されたもので、材質は板目の檜材である。

表側の支拂丸は人名で、以下24と同じく白米五斗を上納したこと記しておらず、やはり付札であ

る。裏面には「十四日中」と日付けが記されている。

これらの墨書き器・木簡の発見は、当遺跡を理解する上で、きわめて意義深いものである。この点について後述するが、今回の仮文作成について、平城宮跡発掘調査部史料調査室長狩野久氏の指導と研究成果によつていて記して謝意を申し述べる。

(稿本)



第9図 墨書き土器・木簡実測図

V じょうべのま遺跡の歴史と性格

現時点で、じょうべのま遺跡の歴史と性格を全て語りつくすことは無理である。ここでは五次にわたって行なわれた調査の総括という意味を含めて、今までに得られた知見と、A・U地区遺構群の性格に関する一応の見通しを述べておくことにする。

構造と性格 A・U地区の遺構群は、建物21棟、構11列となっており、それぞれが6期に小区分される。

A地区における建物数はA期以前が2棟で、A期以降は三~四棟が一期あたりの建物数となっている。これらの建物はA地区中央部を広場として、北・南・西・東の四地区に属するものに群別できる。このうち、北・南の二地区には更に…二棟程度の建物が存在していると予想できる。

A地区的建物群は、規模が大きくて廟を持つ主殿風の建物と、その他の建物に二別できる。主殿風の建物はA期の段階で北部にあったものが、B期以降、東部に移設される。これに伴なって、東部主殿の後面（主殿の西側）に目隠し用の柵列が設けられる。これにより、主殿風の建物に特別の配慮がなされたことがわかる。

又、A地区西側のU地区で、今回新たに倉庫と推定される建物の一部が検出された。これにより、各期に属する倉庫群がこの地点を中心に存在していることがはじめて実証できた。

以上のことから、A・U地区的遺構群は、A地区的建物群と、U地区的倉庫から成る、庄家跡としてはきわめて整理された構造を持って構成されていたことが理解されてくる。特にA地区的建物群は、主屋である主殿を中心付属建物を配しておらず、東大寺領横江庄家跡に比定されている石川県松任市横江遺跡、井波町高瀬遺跡（阿部・舟崎1972）と共に通する点が多く、しかも記録にあらわれる奈良・平安時代の庄家に関する記載内容と一致する（宮本1974）。

すなわち、遺跡としては確認・掌握されることのきわめて稀な、奈良・平安時代における、行政機構の最小単位である庄園庄家跡の実態をよく示していることが理解されるのである。この場合、A地区的建物群が官人の執務と起居の場であったことはうたがいない。

又、構造的にみて、庄家の建物配置がもつとも整備された段階は、A期である。特に、東・南側に庄家を画する柵列が設けられ、庄家の確立期とするにふさわしい。これに、U地区的二~三棟を単位とする倉庫群が加えられ、方100m（約1町）程度の敷地内に庄家が經營されたと推定できる。この建物三~四棟、倉庫二~三棟を庄家の建物構成とみると、先に述べたように、福山敏男博士が天平19年（747）の法隆寺・大安寺の御藍縁起并流記資財帳の記載内容から得た一辺あたりの平均建物数である建物（屋）三、倉庫各二棟の数値（福山1958）に近い。本遺跡においてはこの建物三~四、倉庫二~三棟を建物群の基本構成として、建物個々の位置を変更しながらも、E期まではほぼ同規格で維持され続けたわけである。

庄家の存続期間 据立柱形式の建物の耐用年数は、ほぼ15~20年と推定できる。これに建て替え数六期分を乗ずると、90~120年がその存続期間として割り出されてくる。各期に属する建物が、それ同時に建て替えたとは考えられないが、少なくとも100年に近い期間を持って各建物が作り続けられたことはうたがいない。これは、庄家跡の実例としては、きわめて稀な例と言える。

庄家の年代 年代比定の問題は、伴出した遺物によって検討される。

北陸における奈良・平安時代の須恵器・土師器の編年作業は、吉岡康暢氏によってその先駆がつけられた（吉岡1967）。この点について前章に述べてあるので、必要以上の重複は省けるが、本遺跡出土の土器類は石川県加賀三浦遺跡上層出土土器と相似た要素を持っている。したがって、加賀三浦遺跡上層出土土器類の解釈が本遺跡の年代比定に大きなかかわりを持つことになる。

じょうべのま遺跡A地区出土の土器群は、少なくとも100年間にわたる時間幅を持っているはずである。しかも出土状況からは、きわめて不完全な組成しか持たないと判断でき、年代的に古い時期のものはどの度合いが強いはずである。分類に際しては、この二点に留意して、遺構・地区単位別に土器を検討することとした。特に今回の調査区であるA地区南北について、建物の配置とその所属から、遺構群の後葉期であるD・E期に近い所座のものが、主体を占めると仮定した。

集落遺跡の存続期間が水ければそれだけ長期間にわたる時代の遺物が混合することになり、資料操作が難しくなる。本遺跡を含めて、多くの集落遺跡の資料がそのような状態にあるわけであり、そのことの吟味が必要なのは今さら説くまでもなかろう。

以上を視点に本遺跡出土土器類を見ると、形式差をかなり明確に示し得るものと、その違いを示しがたいものの二種が有すると理解されて来る。前者に属するものは須恵器杯蓋で、その特徴から8世紀後葉に位置づけられる加賀三浦遺跡中層に対比し得る個体が含まれる。後者には土師器杯が該当するが、大まかには薄手→厚手→高台付と変遷することが判明した。しかもこの変遷はきわめて漸移的に移行し、時間的には連続性が強く、断絶は無いと解される。この点は遺構群の解釈と歩調が合い、土器群自体三期に区分できる結論を招いた。

加賀三浦遺跡上層出土の土器と、本遺跡出土土器をくらべると、相似点とともに相違点をその組成から知ることができる。特に加賀三浦遺跡上層出土の土器群杯類のうち、体中部で強く内曲する形式、足高な高台が付く形式、皿類などは本遺跡では全く認められないものである。これを地域差・時期差のいずれかと見るべきことは当然であるが、それぞれ作出した灰釉・綠釉陶器類の特徴と舟崎久雄氏が報告した福光町古館遺跡出土土器類〔舟崎1974b〕の様相から、時期差を持つものが含まれると判断される。すなわち、加賀三浦遺跡上層出土土器には本遺跡のD・E期以降の土器が含まれていると理解できるわけである。特に綠釉陶器類の高台の特徴は、本遺跡が古く、加賀三浦遺跡上層出土品がより新しいことを示している。

これらをもとに、本遺跡の年代比定を行なうと、庄家の成立は奈良時代末に近い8世紀末頃で、以後、平安時代中葉に近い9世紀後葉から10世紀初めまでが庄家存続の実年代として考求されて来る。本遺跡と年代的に重複する加賀三浦遺跡上層の年代として出された吉岡氏の考え〔吉岡1967〕とは少なくとも100年から150年の違いを持つことになる。

これについては、吉岡氏が対比資料として扱った愛知県猿投古窯跡群の年代〔船崎1960・73など〕そのものを、同窯跡群製品的最大需要地域に含まれる奈良県平城宮跡内井戸S E 311・S E 272出土土器〔田中1965〕、同県平城京東三坊人馬東側溝出土土器の調査成果から、所属年代を更にさかのぼらせ再編する考えが高島忠平によって発表されている〔高島1971〕。本遺跡出土の灰釉・綠釉陶器類は、これによりほぼ9世紀前半からせいでい下っても9世紀後半に位置づけできることになる。

このじょうべのま遺跡の年代を支える、今一つの研究は、本県の上器類を独自に体系づけた舟崎久雄の研究〔舟崎1974〕や藤田富士夫氏の立山古窯跡群の調査〔藤田1974〕によってもなされており、特に本遺跡の後業期であるD・E期の土器類と、藤田氏が報告した法光寺谷2・3号窯の須恵器罐にみられる扇形あて具底や、他の製品との類似点は見逃せない。しかも、藤田氏は同窯跡群を時間的な隔りをもちながらも連続した窯跡群としてとらえており、年代観から土器形式変遷のかなりの部分が本遺跡の様相と似ていることを示している。

これらのことから、本遺跡のA期以前及びA期を8世紀末から9世紀前葉、B・C期を9世紀中葉、D・E期を9世紀後葉から10世紀初めと位置づけておく。すなわち、平安時代前葉の庄家跡とみなされるわけである。

墨書き土器と木簡 庄家跡としての性格をもつとも直接的に示す資料は、墨書き土器と木簡である。これに関する資料としては、風字碑〔国版第7-1行〕・杯蓋鏡が検出されており、小型の砥石は木簡を削るために刃子を研いだものと推察される。これらを手元に置き、木簡を配し、各種の事務処理が実際に行なわれていたわけである。「白米五斗」は当時の一俵分の米の分量（現在の二斗）を示しており、奈良時代にまほほん形式で白米が処理されていたことが、平城宮跡の例品〔奈良国立文化財研究所編1969〕から知られる。

墨書き土器に記された文字は、そのほとんどが略称・略号である。しかも書風はしっかりしており、記号的な墨痕は認められない。

丈部氏と東大寺領丈部庄 東大寺領丈部庄の記録は、天平宝字3年11月14日（759年）の越中国新川郡丈部開田地図として正倉院に伝えられている。今回の「丈部古堆丸」が書き入れられた木簡の発見によって、当地をその丈部庄に認めたとする考え方すばり公表されている〔橋本1975、奥田他1975〕。

この点は遺跡の年代感とも概然一致するが、当地を天平宝字年間の丈部庄庄家跡とするにはかなりの無理が認められる。しかし、A期以前に属する二棟の建物がこの年代に近いと考えられることから、庄所内に設けられた二義的な管理所として創建され、後に規模が拡大され、固定化がはかられた庄家と考えておく。これは当地が「西庄」と呼称された最大の理由と考えられ、本来は「丈部西庄」と称されていたと推察できるのである。

東大寺領丈部庄は、開田車の高い庄園として世に知られている。この裏には丈部氏らの活躍が有ったであろうし、庄園の設置自体が丈部氏の開拓した先進性に立脚して行なわれたことは想像にかたくない。庄園名にその「丈部」が採用されたことも、これによってはじめてうなづけるわけである。この開田車の高さはそのまま庄園の存続期間を延ばし、平安時代末から中世にかけて、東大寺領入善庄へと再編成されていくものとなった。この実体を示すのが本遺跡のL地区であり、ここでも数期、約70-80年間にわたって、庄家の建物が設置されていたと考えられる〔高島・舟崎・橋本1973〕。この問題も含め、更に研究が押し進められて、本遺跡の実像が描かれるのもそう遠くないと見えよう。（橋本）

註① U地区における今回の調査区の北側は、自然流水（洪流）によって、基盤層が40-50mにわたって流失している。

流れの方は南東から北西に向かっており、今回見された柱根もその方位に沿って傾斜している（国版第4ド）。

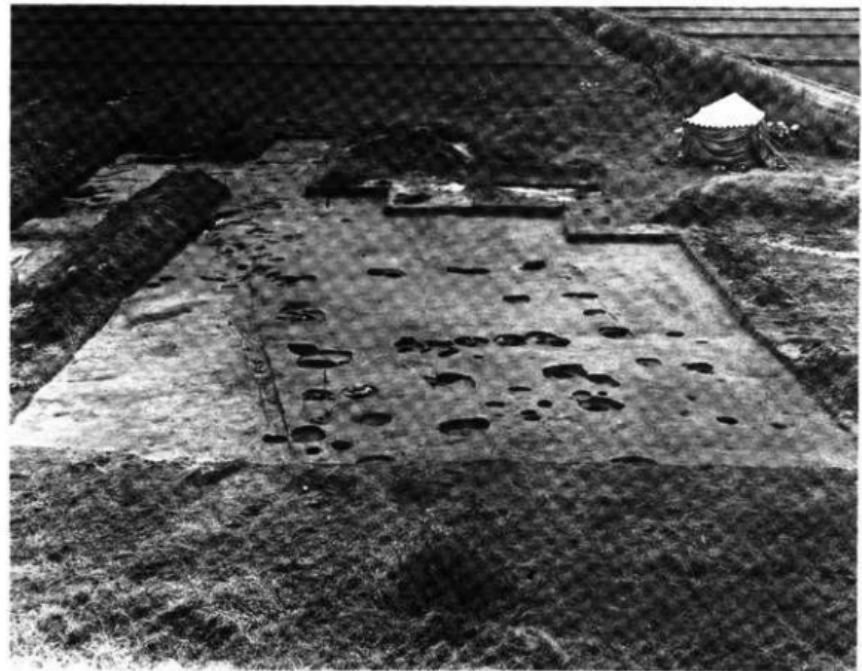
しかし、同発掘区の南側にはA・B地区と同レベルの基盤層が残されており、それ以前では良好な状態で構築が残っていると考えられる。このU地区で検出された流水の跡が、A・U地区建物群廢絶の一因を示していると言える。

註② 庄家と庄所は同義で用いるべき用語ではない。すなわち、庄所は庄家・農落・その他（寺社など）を含む広い地域を示しており、庄家は庄所の中の特に庄園の經營を行なう機構を指すものである。したがって本遺跡については庄家とするのが正しい。

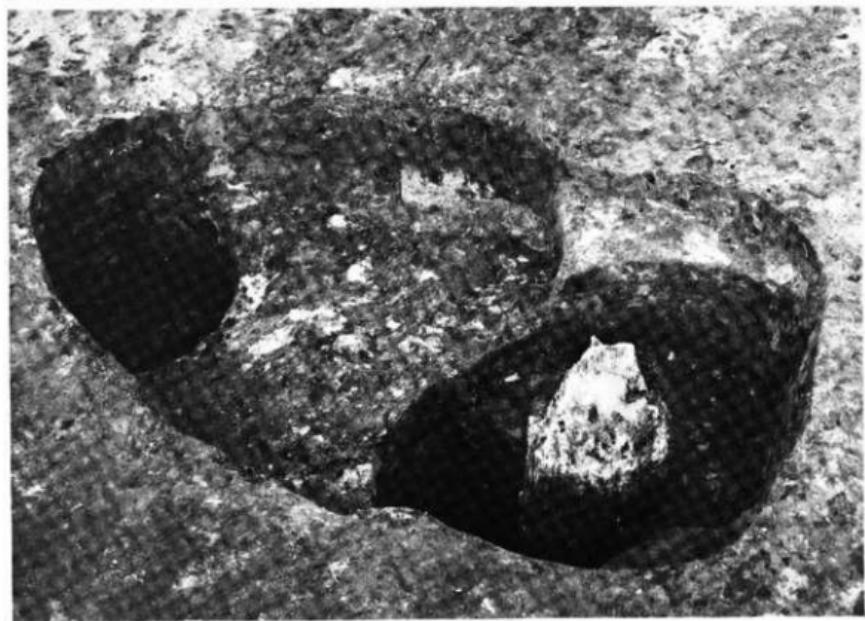
- 註③** 福山敏男博士の研究成果〔福山1958〕による。しかし、その研究で得られた倉庫二・屋三棟の数値は平均的な数を示すものである。庄家の建築構成をもっとも具体的に示す例として著名な、東大寺領越前国桑原庄では、大正勝宝9年（1917）の庄券で倉庫一・所七棟で計八棟となっている。しかも敷地は堀垣から見て一辺375尺となり、ほぼ一町程度であったと推定されている〔宮本1974〕。
- 註④** 井波町高瀬遺跡の庄家跡は、屋一棟が確認されており、建て替えは行なわれていない〔阿部・舟崎1972〕。石川県横江庄跡の庄家跡は屋三・四棟程度で、二期にわたるものと考えられている〔宮本1974〕。
- 註⑤** 主要な遺物はわずか5~10cmの厚さを持つ無褐色土層に含まれており、その層は遺構上面を覆っている。普通、人の生活が行なわれている期間中の発掘物は一定の場所へ整理して捨てられたはずである。掘立柱遺構を伴なう遺跡の場合、柱抜き穴・コミ穴・井戸・溝等が利用されることが多く、遺物の取り扱いも容易である。又、木造跡のごとく、遺構面を覆う包含層から検出される遺物群は、遺跡の発掘時に近い所産のものが主体をなすもののが妥当である。しかし、より古い段階のものが含まれる余地もある、ある程度残されているはずである。したがって、この点は柱抜き穴へ投入された一括資料をもとに、検討されねばならない。
- 註⑥** 吉岡・舟崎久雄両氏の研究成果〔吉岡1967、舟崎1975a〕はその点の配慮がやや欠けている。少なくとも、集落遺跡についてはこの前提を横に置いて編年作業を行なえば、大きな誤謬を招くことになる。
- 舟崎氏が示した井波町高瀬遺跡出土の土器は、じょうべのま遺跡出土の土器とかなりの違いを持っている。この違いは、遺跡の性質によるものであり、具体的にはじょうべのま遺跡出土土器より年代的に古いものをより多く含み、しかも新しいものを含んでいることを指しているのである。全てを一群として、同一的にはとらえられない様相が、そこに見い出されるわけである。これは、高瀬遺跡の存続期間の長さ（少なくとも150~200年間）を示すとともに、全体をなす遺物が集落跡である穴田地区から検出されたことに起因していると言えよう。
- 又、立山町利田横枕遺跡出土土器類の時間幅は、舟崎氏の示したとおりである〔舟崎1974a〕。この奈良時代末頃（8世紀後半）の土器により、東大寺領大和庄家と、横枕遺跡の関係が間接的に示されるはずである。これについては別に詳述の機会を得たいが、遺跡の存続期間と遺物の取り扱いかたが共通する点で重要な遺跡である。
- 史部氏は古墳時代大和朝廷の隸属部民である史部の系統を引き、東國の經營に力のあった阿倍氏の持ちものと考えられている。
- 奈良・平安時代における史部氏の行動範囲はかなり広く、東北から畿内にかけてが主要な活動の場となっている。この点について概説する予定であったが、紙数がつきたので、別に論ずることにしたい。

参考文献

- ア 阿部義平・舟崎久雄1972「富山県井波町高瀬遺跡発掘調査報告」昭和46年・春
- イ 石原与作1970「県下で唯一の古代遺跡群・全国でもまれな庄所の跡か」北日本新聞昭和45年9月11日
- 石原与作1971「史部庄説は正しいか—入善の『ショウベのマ』をめぐって—」北日本新聞昭和46年7月22日
- オ 同東大三東1972「黒寄土器・木簡」「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報」
- 小笠原好彦1971「丹波土師器と黒色土器(2)」『考古学研究』第18卷第3号
- 奥田新作1970「ショウベのマは史部庄だった・東大寺と入善庄との関係」北日本新聞昭和45年12月5日
- 奥田新作1973「新川東部の諸庄園とじょうべのま」「富山史蹟56・57合併号」
- 奥田新作・真田津爾1975「史部村駒田地と西ノ庄について」『富山史蹟59・60合併号』
- カ 寺野久1974「墨店」「富山県埋蔵文化財調査報告書III〔高島他編〕」
- シ 優良史料刊行会編1956「信濃古考叢観下巻」
- タ 高島忠平1971「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」『考古学雑誌』第57卷第1号
- 高島忠平1972「遺跡概要」「入善町じょうべのま遺跡発掘調査概報」
- 高島忠平・橋本正・舟崎久雄1973「入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告(2)」
- 高島忠平・橋本正・舟崎久雄編1974「富山県埋蔵文化財調査報告書III・井波町高瀬遺跡入善町じょうべのま遺跡発掘調査報告書」
- 田中正1965「V'2 遺物」『平城宮跡発掘調査報告IV』
- ツ 坪井清洋1973「井波町高瀬遺跡発掘調査」「セミナー天平・奈良」明日新聞社
- 坪井清洋・町田寧1970「奈良時代の遺物(土器)」
- 「出雲国守屋跡発掘調査概報」
- ナ 奈良國立文化財研究所編1969「平城宮木簡」、同(解説)
- 橋崎彰一1960「上器の發達」『世界考古学人系4』
- 橋崎彰一1973「三彩 錆胎 灰胎 陶磁大系5」
- ハ 橋本正1974「土器(L地区)」「富山県埋蔵文化財調査報告書III〔高島他編〕」
- 橋本正1975「素顔みせた寺領庄園一人美町じょうべのま遺跡―上・下」北日本新聞昭和50年1月16日・同18日
- フ 福山敏男1958「建築」『國説日本文化史大系第3卷』
- 福田富士夫1974「富山県立山古窯跡群」「考古学ジャーナル』No.97
- 舟崎久雄1974 a「土器(A・B地区)」、「土器の編年」「富山県埋蔵文化財調査報告書III〔高島他編〕」
- 舟崎久雄1974 b「福光町古船跡遺跡調査概要」大境第5号
- ミ 水野正評1974「祭礼と儀礼」「古代史発掘・都とむらの暮らし・歴史時代-2」
- 漫農1970「金冠飾を被婆から守れ」入善町じょうべのま・新川郡西と関連深い古代の遺跡が現存」北日本新聞昭和45年8月7日
- 宮本二郎1974「宮殿建堂と記紀形態」「富山県埋蔵文化財調査報告書III〔高島他編〕」
- ム 宗像神社復興期成会編1958「ゆノ島」
- 宗像大社祭祀遺跡調査隊編1971「沖ノ島 宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和45年度調査報告」
- 山内賢一1966「射水郡小杉町黒河新造道遺跡」大境第2号
- ハ 吉岡康輔1967「遺物」「土器の断年的考察」「加賀・浅道跡の研究」
- 米沢康1971「じょうべのま遺跡の史的性質」北日本新聞昭和46年9月29日



図版第1 上-A地区全景(北から、後方が今回調査区)
下-A地区南半全景(北から)



図版第2 上-A地区南半全景(北から)、下-SB 027柱根(右)とSB 028柱穴(左)



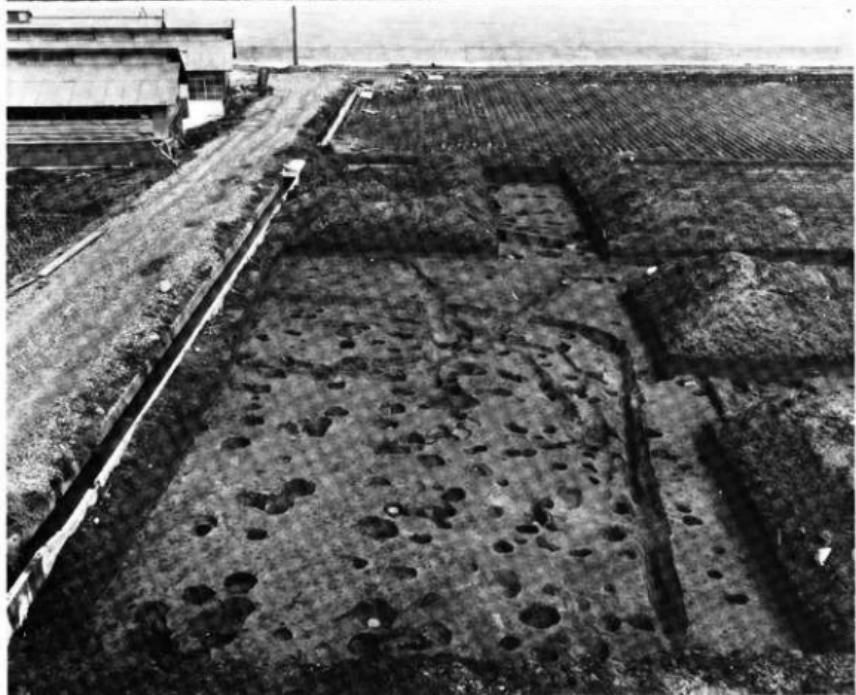
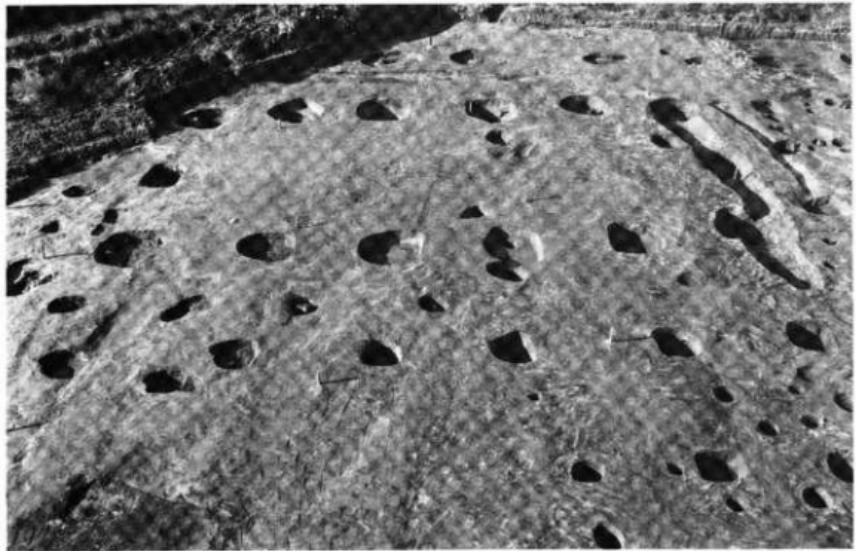
図版第3 上-A地区SB-027・SB-028(西から)、下-A地区SD-022(北から)



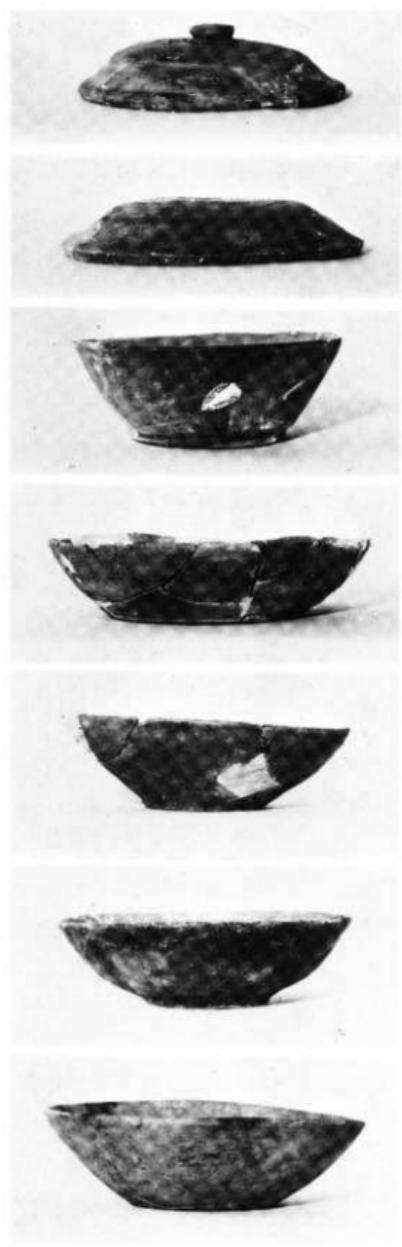
図版第4 上-A地区SB-027柱穴内壁板、下-U地区SB-026柱根(南から)



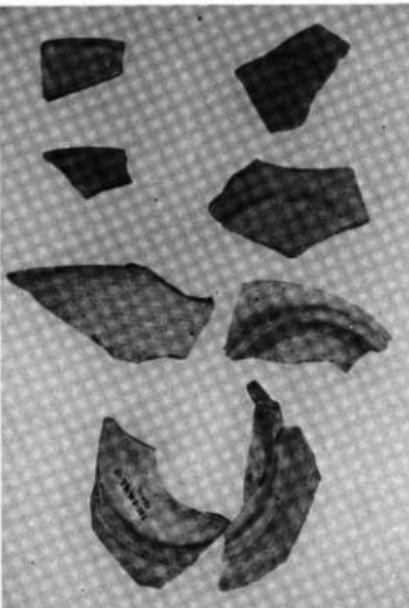
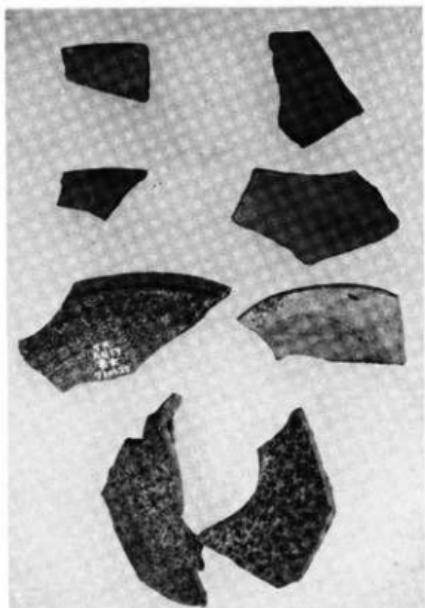
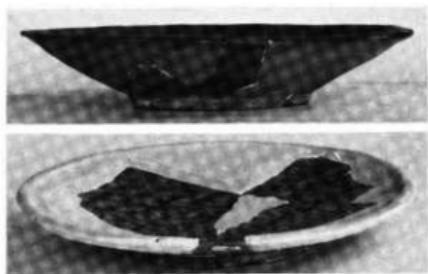
図版第5 上—A地区余景(東から), 下—U地区仓库S B 026(北から)



図版第6 上—第一次主殿SB 001, 下—L地区全景(南から)



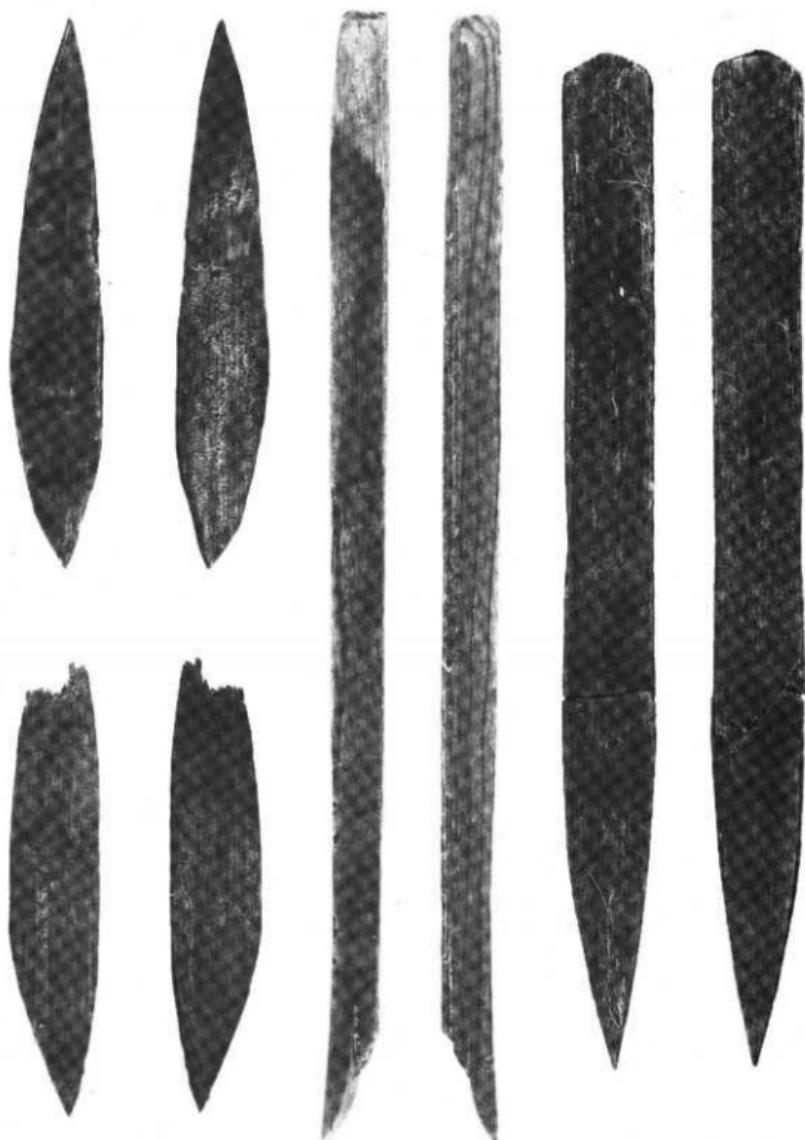
図版第7 頸壺器・土師器と風字甌(右下) S = 1 : 3



図版第8 緑釉・灰釉陶器と、土鏡・磁石(右上) S=1:2



図版第9 第五次調査時発見の馬形(左)・木簡 S = 1 : 1



図版第10 第三次調査時発見の木棒 S = 1 : 1

富山県入善町

じょうべのま遺跡発掘調査概報(3)

発行日 昭和50年3月31日

編集者 富山県教育委員会

発行者 入善町教育委員会

印刷者 富山スガキ株式会社